

市民自治力が脱原発社会を実現させる

脱原発をめざす首長会議事務局長 元国立市長 上原 公子

政権が変わると、世の中の動きはこんなにも激変してしまうのか。どんなに声をあげても、まるで戦前の時代へまっしぐらに突き進んでいるようだと思われている人は、少なくないだろう。では、私たちは何をなすべきなのであろうか。

昨年2回ドイツに招かれ、市民団体、再生可能エネルギー関連企業やNPO、政治家との交流をしてきたが、いつも日本に対する不信と苛立ちを感じていた。自分の国が原発事故の被害を受けながら、もっと言えば世界中に迷惑をかけながら、原発推進の政府を誕生させてしまったこと。再生可能エネルギーの日本視察団が、ひっきりなしにドイツを訪れるのに、外から見ると脱原発への動きが感じられないことが理由のようであった。「ドイツに何を学びに来ているのか」。この言葉が、勉強はするが、行動しない日本人という評価を象徴している。

ドイツでは2011年6月には、福島原発事故後2か月という短時間で「倫理委員会」が10年以内の原発撤退を決定し、むしろ原発推進派であったメルケル首相をして、「福島は私を変えた」と言わしめた。それには、二つの要素があった。一つには、福島原発事故直後に行われた2つの州の選挙で、脱原発派が圧勝した。政治的に市民の意思が発揮されたことである。もう一つは、1986年のチェルノブイリ原発事故以降、ドイツでは再生可能エネルギーによる地域エネルギーの選択を求め、市民の事業の立ち上げと電力会社との闘いがずっと続けられてきた。そして、原発に依存しない再生可能エネルギーによる電気事業の採算性を高める試みが、むしろ地域雇用を生み出す新たな産業として可能性があることの実績を積み上げていた。

いまや、ドイツでは再生可能エネルギーの事業が単に発電のみならず、大きな産業となって、様々な事業が成長を続けている。

ドイツで学ぶべきは、まさにこの、市民の脱原発への強い意志による政治的、実践的行動力であろう。

しかし、日本でも静かに動きは始まっている。単に原発反対と唱えるだけでなく、自分たちで脱原発社会づくりをはじめようとの動きは、各地に芽をだし根を張りつつある。今年5月には、各地ですでに市民事業を始めている40団体による「全国ご当地エネルギー協会」が発足した。地域エネルギーを市民でつくるのが楽しくて仕方がないという、まさにコミュニティパワーが花開いたような勢いのある協会の立ち上げで

ある。大企業も、この動きを敏感に察知している。それが証拠にCMが「オール電化住宅」から、「再生可能エネルギーに貢献しています」というものに変化している。

また、川内原発の再稼働をきっかけに、全国の原発が動き出すのではという懸念は、鹿児島市の市民をも突き動かしている。川内原発のある薩摩川内市の隣、いちき串木野市では、全戸訪問し再稼働反対の署名を全世帯の過半数を集めた。話し込みをすると、署名はしなくとも本音は反対という人が8割だったという。地方に行けば、閉鎖的で政治的意思表示はなかなかできないところが多いが、生命にかかわることとなれば、人の心は動く。1996年、新潟県巻町は原発誘致推進派の町長と議会との闘いに住民が立ち上がり、町長を変え、議会に議員を送り込みついに住民投票を実施して、東北電力の原発建設計画を断念させた事例がある。

市民が主権者であるという自覚を持てば、政治の力で政府の圧力を押し返すことができるのである。

5月21日の「大飯原発運転差し止め判決」は、「原発の運転停止によって多額の貿易赤字が出るとしても、これを国富の流出や喪失というべきでなく、豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富であり、これを取り戻すことができなくなることが国富の喪失である」という実にまっとうな判断を下した。肝心なのは、そのことに地域住民が気づき、子どもの未来に責任を持つためのまちのありようを決定する権利を市民が行使することである。

2012年4月に69人の区市町村長で「脱原発をめざす首長会議」が立ち上がった。2014年8月現在、その首長会員は100人になった。政府の動きに反し、地方自治体では住民の生命の安全と原発の共存はあり得ないと明言する首長が大勢出てきている。自治体が脱原発でまちを作ろうと決意をすれば、市民、企業、行政が一緒になって再生可能エネルギーでの地域産業が起こしやすくなる。

日本の再生可能エネルギーへの歩みの遅さに目を付けた世界の企業は、続々と日本に入り込んで売り込みを始めている。今更海外資本の暗躍に身をゆだねるべきではない。脱原発に向けて市民の自治力が、地域の経済活性のカギを握る時代がやってきた。主権者が、行動することによって、国が動く。改めて民主主義社会は市民が自ら築くことを、市民の自治力で始めるときである。

(うへはらひろこ)